

日の当たる門

小川未明

青空文庫

きかん坊主ぼうずの三ちゃんさんちゃんが、良ちゃんりょうちゃんや、達ちゃんたつちゃんや、あや子あやしさんや、とめ子とめこさんや、そのほかのものを引きつれて、日の当あたつている門もんのところへやってきました。

「学校がっこうごっこをしようや、さあ、ここへならんで。」と、三ちゃんさんちゃんは命令めいれいをしました。けれど、みんなは、まだ学校がっこうへ上あがっていないので、よく字じを知しっておりません。

「気きをつけ、番号ばんごう！」

「一、二、三、四つ、五、六、七つ。」

「さあ、まる書かけ。」

三ちゃんさんちゃんは、ポケットから、白墨はくぼくを出だして、塀へいに大おおきなまる

を書きました。白墨はくぼくを持つている子供こどもたちは、めいめい門もんの上うえへ、またあちらの堀へいの上うえへ、まるを書きましたかが、白墨はくぼくを持つていない子供こどもたちは、ぬかるみのどろんこの中なかへ棒ぼうを入れて、きれいに洗あらつてある門もんの前まえの石いし畳たたみの上うえへ、土つちでまるを書かきました。三ちゃんさんちゃんは、みんなの書かいたまるをひととおりながめて、さも満足まんぞくしたように、

「うん。」と、うなずきました。

「こんどは、なんにしよう?」

「唱歌しょうかだ。あいこく行進曲こうしんきょくをうたおう。」

みんなは、声こゑをあわせてうたいました。

「見みよ、東海とうかいの空そらあけて、きよく日高じつたかくかがやけば、天地てんちの正せ

気はつらつと、希望はおどる大八島……。」「

「もういい。あや子さんが、いちばんうまい。達ちゃんはだめ。」
と、三ちゃんが、点をつけました。

「僕、もつとうまく歌えるやい。」と、達ちゃんは、不平をい
ました。

「こんなこと、もうよしたーと。」と、一人が、叫びました。

「だめ、こんどあつちへいくんだ。原っぱへいって、戦争ごつ
こをするんだ。気をつけ、前へ！」

三ちゃんは、号令をかけました。そして、自分が、いちばん
先頭に立って、テンテンテ、テンテンテ、トテトテト——と、
口でらっぱのまねをして、威張っていきました。その後から、み

んながついて、あちらの横町よこちやうの方ほうへまがつて見えなくなつてしましました。

ちようど、そのじぶん、門もんのある家いえのお勝手かっぺもとのガラス戸どがガラ、ガラとあく音おとがしたのです。ほおと両手りやうてを赤あかくした女じよち中ゆうが、お使用つかいにいこうとして、門もんのところまでくるとびつくりしましました。

「まあ、どこのわるい子供こどもだろう、こんないたずらをして。」と、しばらく立たつて、あつけにとられながら、門もんの上うへや、石いし 畳たたみの面おもてや、塀へいに書かかれた白しろい丸まるや、どろんこの丸まるを見みつめていました。この家いえのおじいさんが口くちやかましいので、毎朝まいあさ、女じよちゆう 中ちゆうさんは、つめたいのをがまんして、門もんをふいたり、石いし 畳たたみをゴシ

ゴシとたわしで、みがくのでありました。女じよちゆう 中なかさんは、お使つかいから帰かえったら、またおそうじをやりなおすうえに、堀へいまでふかなければならぬかと思おもうと、がっかりしてしまったのです。

「このへんには、ほんとうに、わるい子こがたくさんいるとみえて、いやになってしまふ。」と、ひとり、口くちの中なかで、ぶつぶついいながら、出でかけていきました。

この通とおりは、先さきが止とまっているので、あまり人ひとが歩あるきませんでした。それを幸さいわいにしして、また天てん氣きのいい日ひは、朝あさから、昼ひるすぎまで、日ひがよく当あたるので、子こ供どもたちの遊あそび場ばとなっていました。「勇ゆうちゃん、しつかりお投なげよ。」と、敏としちゃんは、ポン、ポンとグラブをたたいていました。

「よし、いい球たまを出すだよ。」と、こんどは、勇ゆうちゃんの強つよく投なげ出しただボールは、敏としちゃんのグラブの中なかに、ボーンといつて、うまくおさまりました。

そのうちに、あつ、という勇ゆうちゃんの声こえがしたかと思おもうと、球たまはねらいをはずれて、ドシンと大おおきな音おとをして、板いた塀べいにうちあたったのです。二人ふたりは、いっしょにくびをすくめました。そして、顔かおを見みあつて笑わらいました。

「おじいさんがしかるよ。」と、そばで見みていたよし子こさんが、いいました。

「しかつたら、よすよ。」と、勇ゆうちゃんが、いいました。

「勇ゆうちゃん、いまのはすべったんだ。もつと強つよくたつていいよ。」

と、敏夫は、元気でありました。

「このボールがいけないんだね。」

二度めに塀へ球があたったときは、板を破りそうな音をたてました。すると、門のところへおじいさんが出てきました。

「おい、子供、あっちへ行ってやれ、門燈をこわすと大事だ。

ここは人のとおる道で、ボールを投げて遊ぶ場所でない。こんど、塀にあたるとゆるさないぞ。」と、おじいさんは、いいました。

おじいさんのひっこむのを見ると、敏ちゃんが、

「塀にあたるとゆるさないって、どうするんだらうね。こんなくさった塀がなんだい。」と、いって、ボールを投げつけるまねをしました。

「原つぱへいこうか？」

「ああ、いこう。」

敏ちゃんとしは、手てに持もっているボールを高く空そらへ上あげて、自分じぶんでうけとつていましたが、どうしたはずみにか、ボールは門もんの内うちへ落おちて、あちらへころころと、ころがっていききました。

「エヘン。」と、おじいさんの咳せきばらいがしました。女じよちゆう中ちゆうが、なにかおじいさんに話はなしている声こえがきこえます。

「いうことをきかなかつたら、とりあげてしまえばいいのだ。」

「ほんとうに、この近きんじよ所じよには、いたずら子こが多おほうございます。」

勇ゆうちゃんとと、敏としちゃんとは、舌したを出だしていました。よし子こさんは、笑わらっていました。

「ボールが入ったから、こちらへ投げておくれ。」と、敏ちやんが、いいました。門の内から、なんの返答もありません。勇ちやんは、しやがんで、門の下のすきまからのぞくと、ボールは山茶花の木の根もとのあたりにころがつていました。

「さおを持ってこようか。」と、敏ちやんがいました。

「あちらへ、ころがつてしまわないかな。」

「よし子さん、取ってきてくれない。」と、勇ちやんがたのみましました。

「いやよ。」と、よしさんは目を大きくみはりました。

「困ったなあ。」

「みんな内へ入ったら、僕とってくるから。」

そのうちに、女中じよちゆうもいなくなるし、おじいさんも、庭にわの方ほうへいったようです。勇ゆうちゃんは、門もんのわきについている扉とびらをおすと、チリン、チリンとけたたましく鈴すずがなりましたが、彼かれはすばやく内うちへかけ込んで、ボールを拾ひろうと、また走はしって門もんの外そとへ出でました。扉とびらをしめるときに、力ちからをいれて引ひいたので、チリ、チリ、チリンという音おとが、けたたましくしました。

「さあ、原はらっぱへいこう。」

たちまち、子供こどもらの姿すがたは、ここから見みえなくなってしまうし
た。

* * * * *

その翌あくるひ日ひもいい天気てんきでした。この門もんのところには、朝あさ早はやく

から日ひが当あたつていたのです。

炭屋すみやの小僧こぞうさんが、堀へいによりかかつて、ぼんやりとひなたぼつこをしていました。夜よるの間に降おりた霜しも柱ばしらが、日ひの光ひかりをうけて、しだいにとけています。敷しきいし石いしの上うえは乾かわいているが、土つちの上うえをふむと足あしの跡あとがつかまりました。

「もう、得意とくいをまわつたのか、早いはやなあ。」と、そこへやつてきたのは、同じ年おなとしごろの酒屋さかやの小僧こぞうさんでありました。

「寒さむくてしようがないや。」

「そんなに肥ふとつていても寒さむいかなあ。」

「ばかいつていらあ、おまえは寒さむくないか。」と、炭屋すみやの小僧こぞうさんが、いいました。

「相撲すもうとろうか、おまえは強つよそうだな。」と、酒屋さかやの小僧こぞうさんが、
いいました。

「おまえとなら、負けまやしない。」

「じゃ、こい！」

「よしきた。」

二人ふたりの小僧こぞうさんは、日ひの当あたる前まえの石いし畳たたみの上うへで、たがいに
押しおあい、もみ合あいしていました。うん、うん、といううなり声こゑ
がきこえたのです。梅うめの盆ぼん栽さいを縁えん側がわにおいて、ながめていた
おじいさんは、小僧こぞうさんたちのうなり声こゑをきいて、なんだろうと
思おもいました。

「また、うちの門もんのところで騒さわいでいる。あすこは、よく日ひが当あ

たるものだから、いいことにして、みんなあすこへきて、堀へいによりかかって、きれいにしておく石いしの上うえをよごしてしまふ。どれ、ひとつどなってやろうか。」

おじいさんは、わざと勝手かかってもとから、門もんの方ほうへまわりました。そして、堀へいについている節穴ふしあなから、外そとのようすをのぞいて見みました。すると、いま二人ふたりの小僧こぞうさんが顔かおを真まつ赤かにして、たがいに負まけまいとして取り組とくんでいる最中さいちゆうでした。

「ははあ、やっているぞ。」と、おじいさんは、しかることを忘わすれてしまつて、じつと、どちらが勝かつか、負まけるか、見みとれていました。

「そうだ、そうだ、もうひと押おしだ。」と、おじいさんは、自分じぶん

でも力りきんでいました。そして、心こころに、五十年も昔ねんむかしに友ともだちと相撲すもうをとったことを思い起おもこしたのです。

「そうだ、そうだ、うん、どちらもなかなか強つよいぞ。」と、口くちの中なかで、おじいさんは、いつていました。

ふたり 二人の小僧こぞうさんは、どちらも力ちからがあつて、いい勝負しやうぶだったが、炭屋すみやの小僧こぞうさんのほうが肥ふとっているだけに、体たい力りよくがつづくのみえて、酒屋さかやの小僧こぞうさんはへとへとになつて、石いし 畳たたみの上うへへ倒たおれてしまいました。

「やつぱり、おれは弱よわいなあ。」と、酒屋さかやの小僧こぞうさんはため息いきをつきながら、悲観ひかんしました。おじいさんは、

「なんだ、そんなにくじがないことかどうか。もう一番ばんやつて

みる。」と、心こころの中なかで、叫さけびました。

「どれ、もう一度どやろうか。」と、酒屋さかやの小僧こぞうさんは、立たち上あがりました。けれど、こんどは、なんの苦くもなく、炭屋すみやの小僧こぞうさんに、たたきつけられてしまいました。

「おまえなんか、いくらかかってもだめさ。」と、炭屋すみやの小僧こぞうさんは、威張いばりました。酒屋さかやの小僧こぞうさんは、いかにもくやしそうです。これから、毎まい朝あさ道みちであつても、炭屋すみやの小僧こぞうさんに頭あたまが上あがらないと思おもうと、残ざん念ねんでたまりません。

「おい、もう一度どやろう、今こんど負まけたら、降こう参さんするよ。」と、酒屋さかやの小僧こぞうさんは、いいました。おじいさんは、

「そうだ、その意気いきだ、しつかりやれ。」と、心こころの中なかで、酒屋さかやの

小僧こぞうさんに応援おうえんしながら、堀へいの節穴ふしあなから目めをはなしませんで
した。

「いいか、今度こんど負けたら降参こうさんするんだぜ。」

「いいとも。」

二人ふたりは、たがいにならみあつて、白しろい息いきをはあはあやつていま
したが、酒屋さかやの小僧こぞうさんは、弾丸だんがんのように、相手あいての胸むねへ飛とび込
んでいききました。二人ふたりの顔かおが、たちまち真まつ赤かになりました。さ
あ、今度こんどこそ大相撲おおずもうです。一人ひとりは肥ふとつて力ちからは余あまっているし、一
人ひとりは、負まければ恥はじになるだけでなく、いよいよ降参こうさんしなければ
なりません。どうしても負まけられない一番ばんです。見てみいるおじい
さんまでが、苦くるしくなつてきました。

「うん。」

「うーん。」

二人は、^{ふたり}うなりつづけて、^く組み合つたまま押したり、^お押し返し^{かえ}たりして、^{あいて}相手のすきをねらつていました。

「うーん。」と、おじいさんもうなつて、^{じぶん}自分までが相撲^{すもう}をとるような^{きもち}気持ちでいました。ちようど、そこへ^{じよちゆう}女中^{ぢゆうちゆう}が、

「また、あすこへきて、^{いしだたみ}石畳^{うえ}の上をよごしている。」と、^{くち}口^{ごごと}をいいながら、^{かかって}お勝手^{かたて}もとから^で出てくると、おじいさんは、^て手で^おこちらへきてはならぬと^お追^{かえ}い返^{かえ}しました。なんと^おいつても、^{さかや}酒屋^{こぞう}の小僧^{こぞう}さんは、^おいっしょうけんめい^おです。うん、うん、^{すみや}炭屋^{こぞう}の小僧^{こぞう}さんは、よく^おこらえ

ていました。

「もうひと息いき。」と、おじいさんが、いったと同時に、酒屋さかやの小僧こぞうさんがここぞと押おした力ちからに、炭屋すみやの小僧こぞうさんはどつと仰向あおむきに倒たおされて、ミシ、ミシといって、塀へいの板いたはこわれました。酒屋さかやの小僧こぞうさんは、勝かった喜よろこびもどこへやら、急きゆうに顔かおの色いろを変かえて、倒たおれた炭屋すみやの小僧こぞうさんと、こわれた塀へいとを見みくらべましたが、

「よし、よし、塀へいなんか、かまわない。おもしろかったよ。」と、おじいさんが、ふいに門もんの外そとへ出でましたので、二人ふたりの小僧こぞうさんは、二度どびつくりして、おじいさんに、いくたびも頭あたまをペコペコ下さげて、いつてしまいました。

「ああ、子供こどもは元気げんきでいいなあ。」と、おじいさんは、空そらを見み上あ

げました。そのおじいさんの顔かおを見て、太陽たいようは、にっこりと笑わらいました。それからおじいさんは、子供こどもが家の前まえへきて遊あそんでも、しからなくなつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

※表題は底本では、「日《《ひ》》の当《《あ》》たる門《《もん》》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日の当たる門

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>